

両親から聞いた第二次世界大戦の記憶

長久手市蟹原 藤田恵美さん

私の両親は、昭和17年頃に結婚し、当時の満州国に渡り、その数年後に終戦を迎えました。戦争が終わると両親は、満州で生まれた兄を連れて引揚船で日本に帰ってきました。私が子どもの頃、父は夕食の度に、「戦争中は何をすることも命がけだった。」と話してくれました。当時、小学生だった私は、毎日、夕食の度に父から戦争中の話を聞かされ、「またか」と思って聞いていたので、今でも鮮明に覚えています。

両親はすでに亡くなっていますが、まだ20歳を過ぎたばかりの若い2人にとっては、想像を絶する出来事だったと思います。現在、私は孫がいる歳になり、あの時両親から聞いた体験談を風化させずに、次の世代へ引き継いでいかなければと思いました。

両親が満州にわたった当初は、バラ色の生活だったようですが、それも長くは続きませんでした。昭和20年8月に日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連軍が満州国に攻めてきました。父は、捕虜として捕まりシベリアへ連れて行かれそうになりましたが、途中で汽車から飛び降り、見つからないよう車輪に隠れながら何とか逃げ延びることができました(見つかったら殺されていました)。また、母は、ソ連軍兵士に暴行されるといけないので、身重な体で必死に逃げ回った末、満州の地元の人たちに助けられ無事に長男を出産しました。

その後、父は母と再会することができ、乳飲み子の兄を抱えて(お腹の前に縛って)引揚船で日本に帰ることができました。幸い兄は元気に帰ることができましたが、船内には十分な食べ物がないので、母親のおっぱいが出ず、病気や栄養失調が原因で、何人もの赤ちゃんが亡くなるのを目の当たりにしたそうです。亡くなった赤ちゃんは、海へ投げ入れるしか方法がなく、本当に地獄だったと聞いています。

また、父は、旧制高校時代、名古屋城下で行われた訓練中に何度も往復ビンタを受けたそうで、生前名古屋城へ行くと、「その時の辛い思い出が蘇ってくるから近くを通りたくない。」と話してくれました。

以上が両親が語ってくれた第二次世界大戦中の体験談の記憶です。